

# 中国と日本の近代

—— 近代中国の日本理解をめぐって ——

Chinese Views of Modern Japan

清 水 稔

## 1

日中両国は、1840年の「アヘン戦争」と1853年の「ペリーの浦賀来航」に象徴されるように、ほぼ同じ時期にウェスタン-インパクトに見舞われた。その結果として中日両国の“近代”は、ともに欧米諸列強によって押しつけられた、半植民地的な不平等条約を背負って出発したが、その後の両国が歩んだ道は、日本の中国侵略と、それに対する中国の抵抗の歴史であったといえる。

アヘン戦争の敗北によって開国を余儀なくされた中国は、さらに1856年のイギリス・フランス連合軍によるアロー戦争によって、ヨーロッパの侵略の脅威にさらされることになった。それに対して中国の内部では、開明的な知識人 — 中国では士大夫あるいは読書人という — が中心となって、清朝の政治体制の崩壊と中国民族の滅亡をふせぐために、必死に西洋に学ぼうとする運動を起こした。それは、洋務運動・変法運動とよばれる体制擁護を前提とする改良運動となり、さらには満州人の王朝を打倒して漢民族による共和の国家を実現しようとする革命運動となった。その結果、1911年の辛亥革命が起り、二千年つづいた専制王朝体制が打ち倒され、アジアで最初の共和制の国家が樹立された。それにもかかわらず中国は、列強と軍閥による圧制のもとに自立することができず、それからの解放は、1949年の中華人民共和国の成立するまで待たねばならなかった。

一方、日本は、ペリーの来航を直接のきっかけとして開国し、さらに幕藩体制の崩壊、明治維新の変革をへて近代国家として自立をとげ、やがて日清・日露の両戦争の勝利によって世界の列強の一員となり、中国への侵略を加速していった。

このように日本と中国は、ともにウェスタン-インパクトによって「世界史の近代」のなかに包摂されたにもかかわらず、その後の歴史の展開は、中国が半植民地・半封建社会の道をたどったのに対して、日本は独立した近代国家として資本主義の道を突き進んだ。これは実に対照的であったといわなければならない。

ここでは、このような日中両国の歩んだ道の違いのなかで、中国人は明治維新や日本の近代をどのように認識したかを考え、またその認識が日中両国の相互関係のなかでどのように変化したかを検証する<sup>(1)</sup>。

## 2

明治維新とそれによって生み出された日本の近代に対して、中国の人びとは大きな関心を示してきた。明治初年から今日にいたるまで、多くの中国人が明治維新と日本の近代について論じてきた<sup>(2)</sup>。それらの多くは、中国におけるそれぞれの時代の政治課題に、それぞれの立場で答えようとしたものである。明治維新と近代日本への強い関心は、日清戦争の敗北という衝撃を契機として、変法派によって政治改革の実践目標にまで高められた。

ところで、多くの中国の知識人が日本を訪問し、日本への関心を急速に高めるようになってきたのは、1871年の日清修好条規が締結されて以後のことである。それは、彼らが公使館員その他の資格で来日し、彼らの筆による日本関係の書物が、つぎつぎと出されるようになったからである<sup>(3)</sup>。来日した中国人たちは、西洋文化を積極的に摂取して富国強兵政策を進め、変容しつつある日本に驚異の目をむけた。明治維新から日清戦争の頃までの中国は、ちょうど李鴻章らを中心とする洋務運動期にあたり、日本の近代化はおおいに注目されていた。洋務運動というのは、対外的にはアロー戦争による敗北と、国内的には

太平天国の鎮圧を背景にして、崩壊しつつある清朝の支配体制を再編・強化することをめざした改良運動である。そのために、ヨーロッパのすすんだ科学技術を、はじめは軍艦と兵器の分野に、のちには鉱工業の分野に導入して中国の近代化をはかろうとしたものであるが、それはあくまでも中国文化の不変性・優秀性（中体西用論）を前提としたものであった。

洋務運動期の日本論は、明治維新および日本の近代化＝富国強兵政策に対して関心を示してはいたが、必ずしも高い評価を与えていたわけではない。まず洋務派に批判的な保守頑固派の立場からみると、1880年に来日した清朝の高官の著述といわれる『日本雑記』は、明治以前には民富の豊かな国といわれた日本が、新政府のもとで西洋と通商し、富強のモデルとして西洋流を採用してからは、人民からの徴税が中国のそれをはるかにこえ、日本の民は以前にもまして貧困となっている、と指摘している<sup>(4)</sup>。そこでは、中国文化に対する強い自負を前提に、自国の近代化（洋務運動）をも含めた近代化を否定する論調を読みとることができる。

洋務派の立場からみると、1876年にアメリカ視察旅行の途中に日本にたちよった李圭や翌年初代の駐日公使として着任した何如璋らは、日本が明治維新以後ヨーロッパの近代的な科学技術を導入して強国に変貌しつつある側面については評価している<sup>(5)</sup>。しかし、日本のヨーロッパ化が技術的な面にとどまらず、暦・食事・服装・建物・日用品などの生活様式や学制・兵制・官制などの社会制度にまで広がっていることに対して懐疑を表明している<sup>(6)</sup>。そこには、日本の近代化を中国のモデルとしたり、強国となりつつある日本と提携するというような考え方はなく、中国の伝統的な文化や制度になお強い自信があり、これを守るためにこそヨーロッパの軍事・工業技術を導入するのだという、当時の洋務派の立場が端的に表明されているように思われる。

一方では、琉球・台湾・朝鮮をめぐる日清間の対立のなかで、近代化された日本の侵略に対する警戒論も強かった。1874年の日本の台湾出兵直後に書かれた陳其元の『日本近事記』は、攻日論の急先鋒であった。そのなかで、日本はむかしから中国に服従していたのに、そのことを忘れて近来総てを西洋に倣い、みだりに自強をはかり、ひそかに領土の拡張をはかっていると非難し、日

本討つべしと主張した<sup>(7)</sup>。また1882年に第2代駐日公使黎庶昌の随員として来日した姚文棟も、今日の日本の状況は、

2, 3歳の小児(日本)が親(中国)の愛情を頼りに好き勝手なことをする  
ようなもので、こらしめねば誰憚ることなくいつまでも勝手なことをする  
であろう。

と述べて対日警戒論をあらわにしている<sup>(8)</sup>。日本があまり強くなならないうちに日本を討つべきであるという議論は、「大国」である清国と「小国」の日本という当時の両国関係と、彼らの根強い中華意識とが重なりあって生み出されたものである。

このようななかで明治維新およびその後の日本の近代化を総体として肯定的にとらえた人<sup>(9)</sup>に、初代駐日公使何如璋とともに来日した参贊で、詩人でもあった黄遵憲がいる。彼は、『人境廬詩草』・『日本雜事記』・『朝鮮策略』などのほかに、『日本国志』という膨大な日本論を書いた。1887年に完成し1895年に出版された『日本国志』(全40巻)は、日本滞在中にえた内外200余種にのぼる書物を参考にして書かれ、執筆に8年から9年を費やしたといわれる。それは、当時の中国における総合的な日本研究書として時期的にもはやく、またその系統性・革新的見地においても注目すべきものであった。彼の日本研究の目的は、中国と日本との比較を通して、中国の独立と改革の道をさぐることにあった。『日本国志』は、中国の史書の体裁にならって国統志・隣交志・天文志・地理志・職官志・食貨志・兵志・刑法志・學術志・礼俗志・物産志・工芸志の12志で構成されている。巻頭の国統志では国生みの神話にはじまる日本の通史を披歴し、また各志では明治新政府の諸政策を詳細にとりあげて、それに全面的な検討を加え、ひとつの歴史像を構築している。彼は、島国日本が明治維新によって卓然として独立しえたのは、西法に従い旧を改め新をとり入れたことによる、そこには日本人の進取性、つまり旧来の習慣にこだわらず新しいものを意欲的に摂取する気風があったことを指摘するとともに、当時の中国人があまり関心を示さなかった尊王攘夷の運動や自由民権運動に着目した。そのなかで明治維新およびその後の日本の発展の原動力は、尊王・攘夷(その意図はともに倒幕にあったという)を唱えた志士たちが時勢の変化に際会し、そ

の変化に適応できるように努力し、ついに国是を定めて国の基礎を固めたことにあるとか、自由民権運動の高揚の原因は、明治維新以後すべてを西洋に倣って制度を定めながら、西洋でもっとも重要視される国会の開設を遅らせていることにあるとかの指摘は実に卓見であるといえる<sup>(10)</sup>。このように彼の日本に対する見方は、洋務派的な発想をこえ、のちの変法派に通ずる側面をもっていた。

日清戦争によって「大国」中国が「小国」日本に敗れたことは、梁啓超の「わが国四千年の大夢をよびさました」<sup>(11)</sup>との形容に示されるように、中国の知識人に大きな衝撃を与え、彼らによる新たな政治活動が展開された。それが、1898年の、いわゆる「戊戌の新政」を頂点とする変法運動である。変法運動というのは、日清戦争の敗北、それにつづく三国干渉や租借地・勢力範囲の設定など中国の權益が列強によってつぎつぎと奪われていくなかで、「亡国の危機」にめざめた知識人たちが、ときの若き皇帝光緒帝のもとで立憲制による近代国家を樹立しようとした改良運動のことである。さきにもべた黄遵憲の明治維新観は、この変法運動の担い手たち（変法派）によって継承された。彼らは、黄遵憲のそれをさらに一步進めて、明治維新とその後の日本の近代化政策を中国が見倣うべき鑑として全面的に肯定した。

変法派の中心的人物であった康有為は、変法のモデルをピーター大帝の心法と明治維新の政法に求めた。彼は、『日本明治変政考』の序文（1898年）のなかで、日本の近代化の勝利にいたる産みの苦しみと中国の現状とを比較し、中国の優位な条件をもって変法すれば、中国の近代化はたちどころに実現できるであろうというのである。その優位な条件として、

- (1)中国は日本より財富が豊かであること、
- (2)日本が朝廷と幕府という二元的な政治体制であるのに対して、中国は皇帝による一元支配だから、皇帝が上からイニシアチブをとることが容易であること、
- (3)日本はヨーロッパ文化を吸収するのに、文字が違うためにひじょうに苦勞したが、中国は日本と文字や習慣が同じであるから、日本を通じて日本が摂取したヨーロッパの近代文化や政治体制を吸収すればよいこと、

などをあげている<sup>(12)</sup>。さらにこのような困難をかかえた日本の維新＝変法が速やかに成功したのは、その初めにおいて見通しをもった方針がきめられ、手順が道理にかなっていたからであり、その要点は、

- (1)群臣に誓約せしめ国是を定めたこと、
- (2)対策所を設け賢才を招募したこと、
- (3)制度局を開いて憲法を定めたこと、

にあると指摘した<sup>(13)</sup>。ここではむしろ維新の経過・内容よりもその手順（形式）が問題とされているのが特色ともいえる。康有為は、このような観点から明治維新の全面肯定とその模倣を主張したのである。

### 3

変法運動を流血のうちに葬り去った清朝政府は、義和団運動の弾圧後、自らの手でその変法を実施せざるをえなくなった。これを一般に新政・憲政とよんでいる。この改変のなかで、とりわけ留学の奨励、官吏登用試験である科擧の廃止、新式の学校の設置など大幅な教学体系の改変によって、為政者が期待した体制補強の意図とは逆に、清朝に批判的な新しい知識人が生み出され、彼らは改良派（立憲派）・革命派とよばれるグループを構成した。そのなかから中国各地で独自の闘いを進めていた各革命派が大同団結し、1905年8月20日、東京で中国革命同盟会を結成するにいたった。

ここで同盟会の中心人物であった孫文をはじめとする革命派の近代日本の認識について検討する。

孫文が明治維新とその後の日本に初めて言及したのは、日清戦争のさなか1894年6月に、時の政界の実力者李鴻章（直隸総督兼北洋大臣）に「救国の大計」を建言したときである。そのなかで孫文は、日本の明治政府が「富国の大経、政治の大本」として、人材の登用、農業の開発、科学技術の導入、通商運輸の振興の4つをとりあげ、それを挙国一致の体制でなしとげ大きな成果をあげた点を高く評価し、中国もこれに基づいて改革をただちに実施すれば、20年で西洋を凌駕できるであろうと述べた<sup>(14)</sup>。この建白のころのみは不発に

終わったが、これを転機にその後の孫文は革命への道を歩みはじめることになる。1905年8月13日、留日学生たちが東京麹町の富士見楼で催した孫文歓迎会の席で、孫文は「中国は共和国を建設すべし」と題する講演を行なった。そのなかで彼は、明治維新をアジアにおける民族独立の第一歩を切り開いた革命であると位置づけ、日本がわずか30余年で世界の6大強国のひとつになりえたのは、維新における少数の志士が起爆力となり、国家の責務を担って行動してきたからであるとした<sup>(15)</sup>。そこには、まだ当時であっては少数派にすぎなかった革命派を日本の志士になぞらえ、留学生たちを鼓舞する意味あいもあったであろうが、一面では、孫文の日本への期待 — ひとつは革命派に対する日本の援助、ひとつは中国近代化のモデルとしての期待が、強くこめられていたようにも思われる。

しかし革命派が、日本の独立や富国強兵政策を手放しで肯定していたわけではない。日露戦争<sup>(16)</sup>を契機に、日本の朝鮮に対する植民地支配や満州への侵略が強まっていくなかで、彼らの目は大きく開かれていった。同盟会の機関誌『民報』は6大主義のひとつとして「日中両国の国民的連合」というスローガン<sup>(17)</sup>を掲げてはいたけれども、日本の侵略政策に対する批判は、ときの革命派のなかですでにかなり広範に存在していた。たとえば、1905年12月、日本政府の公布した清国留学生取締規則に対する中国人留学生の反対闘争のさなか、大森海岸で投身自殺した湖南の革命家陳天華は、その遺書のなかで、日露戦争における日本の勝利が中国を列強の分割から救った点を功績として評価したが、一方では日本による侵略の危険性を次のように指摘している。

日露戦争のおかげで堂々たる中国が日本に保護されたにすぎない。保護とは自分に勢力がなく、全く他人のおかげをこうむることである。朝鮮がそうである。中国も自ら強くなり、東アジアの保全の義務を分担できる力を持つのでなければ、朝鮮と同じ運命となるであろう<sup>(18)</sup>。

しかしここにみられる日本への警戒心は、むしろ中国人の覚醒を促す意味あいが強いといえる。

これに対して浙江出身の革命家章炳麟の近代に対する批判はラディカルであった。彼は徹底した排満民族主義者であり、その革命思想は華嚴と唯識の理論

によって構築されている。彼は、無私の行動が異民族の圧迫と差別を排除する、圧迫と差別を排除すれば民族は究極において自己の主体性を失い無に帰す、との考え方にたち、革命によって何かをえるという発想を厳しく拒否した。また彼は、文明の進化=近代化は我執の産物にすぎない、社会が進化すればするほど悪も進化し獸性（侵略性）も進化する、幸福を増進させようとすれば苦しみもそれに比例して増す、と考えた<sup>(19)</sup>。章炳麟は、近代文明に抵抗することで民族的主体性を確立しようとしたのである。彼は、このような認識にたつて西洋のなかに帝国主義を、日本の近代のなかにもっとも早く植民地主義を見出して果敢に批判した。それはまた、変法派の康有為らが進化する近代文明のなかから有益なものを摂取して清朝の再生をはかろうとしたこと、孫文が欧米や日本に対し楽観的に物心両面の援助を求め続けたことと対照的であったといわなければならない。

さらに日本の役割をもっとも激しく批判したのは、章炳麟と親交のあった江蘇出身のアナーキスト劉師培である。彼は、1907年11月、当時のアジア情勢を分析した論文「亞洲現勢論」のなかで、帝国主義を現在の世界の害虫、日本帝国主義をアジア諸民族の共通の敵として告発した。それによると、

白人諸国は日本の軍事力を利用して自国のアジアの属領を制圧しようとしている。つまり日英同盟は、イギリスがインドの死命を、日仏協約はフランスが安南の死命を、それぞれ日本と連合して制しようとするもの、日仏・日露の両協約は、フランス・ロシアが日本とともに中国の分割をもくろむ伏線である。他方、日本も進んで列強と連合し、これによってインド・コーチシナに貿易を拡大し、また朝鮮・南満州における支配権を強化しようとしている。

というのである<sup>(20)</sup>。劉師培のアジア分析のメスは、日本が極東のなかで帝国主義諸国の共通の憲兵・番犬としての役割を担っていることを鋭くえぐりだしているといえる。

また1911年の辛亥革命前後には湖南出身の革命家宋教仁が、日本の朝鮮における非文明・非人道的な支配、中国・朝鮮への資本による経済侵略に厳しい批判の目を向けた。宋教仁は、



日清・日露における日本の勝利は武力の侵略政策によるもの、今の日本は国際情勢の変化のなかで経済と武力による侵略政策を併用して人の死命を制せんとしている。朝鮮の歩んだ道がそれである。やがて東アジアにその覇を唱えることになるであろう。

と述べ、外国からの借款に強い警戒心を抱いていた<sup>(21)</sup>。それは、孫文が外国からの借款をたえず引き出そうとしていたことと対照的である。

対日批判が本格的に強まっていくのは、1915年1月18日、日本による対華21か条要求以後のことである。21か条要求というのは、日本が袁世凱の帝制を承認する代償としてさまざまな権益を中国におしつけようとしたもので、そこには、中国の主権を損なう条項が含まれており、朝鮮の独立を奪った日韓議定書（1904年）と軌を一にするものであった。孫文は、この日本の対華21か条要求に対して憤慨の情を示し、「（これは）中国を第二の朝鮮とする城下の盟にほかならない」と批判してはいる<sup>(22)</sup>が、それは反日というよりは、むしろ袁世凱が帝をえようとして甘んじて国を売った点に対する非難が主となっている。しかしそれ以後、拡大の一途をたどる日本の中国侵略と、これに対する中国民衆の反日の意識と運動の高揚という状況のもとで、孫文も対日批判を強めざるをえなくなった。1917年から19年にかけて孫文の対日姿勢は明確化され、中国の革命事業に対する日本政府の同情と理解をえようとするより、むしろそれを批判するようになる<sup>(23)</sup>。

## 4

孫文の対日観は、1919年以降、日本への期待から日本への批判へと大きく転換することになった<sup>(24)</sup>。その背景には、日本の北方軍閥への援助に対する失望、ロシア革命・五四運動の影響などをあげることができる。孫文の対日批判の2例を紹介しておく。孫文は、1919年6月、山東問題をめぐる『東京朝日新聞』の太田上海特派員の質問に答えるなかで、日本を帝国主義とよんで大要次のように述べている。

中国の民党は、50年前の日本の維新の志士といえる。日本はもともと東

方の一弱小国、発奮してたちあがり、弱を変じて強となった。わが党の志士も、日本の志士の後塵を拝して中国を改造しようとした。私が日本との親善を主張したのもこれによる。ところが、日本の武人が、帝国主義の野心を逞しくし、維新の志士の心意気を忘れて、中国をもって抵抗少なきの方向となし、これに向かうに侵略政策をもってした。そのため日本と中国との立国の方針は、根本的に相容れなくなってしまった<sup>(25)</sup>。

また国共合作の前夜、1923年11月16日に犬養毅（山本権兵衛内閣通信大臣兼文部大臣）にあてた書簡のなかでも、孫文は日本への絶望を次のように吐露している。

日本の明治維新は中国革命の原因であり、中国革命は実は維新の結果である。この両者は、東アジアの復興を図ろうとする同一の目的をもっていた。しかし日本は、中華民国成立以来12年このかた、中国革命に対し反対に出、それに失敗すると、偽りの中立を装って体裁を整え、かつて一度も徹底した自覚をもって毅然として中国革命を援助することがなかった。また日本は、ヨーロッパの侵略政策のみを知り、はては朝鮮を併呑するという暴挙までおかし、アジア全域の人心を失ってしまっている<sup>(26)</sup>。

以上を通していえることは、康有為らのように、明治維新によって成立した近代日本の立憲君主制をそのまま中国にもちこむことについては、孫文は明らかに否定的であった。しかし、孫文は明治維新を「民族」革命として高く評価し、それをその後の日本「国家」のアジア侵略と切り離して考えていた。そこには、日本の侵略は、維新の真の意義と精神から逸脱した行為であり、それはなお転換されうる可能性があるものとして、孫文にはとらえていたようにも思われる。

ところでその後の日中関係は、1927年の山東出兵、28年の張作霖爆殺事件、31年の満州事件、37年の日中戦争へとつきすすんだ。そのなかにあって中国の知識人たちは、日本軍国主義との闘いを、民族の生死を賭けた不可避の課題として自覚し、日本の資本主義・帝国主義の特質を究明しようとした。そのなかで日本の侵略的な特質が明治維新の過程＝日本の近代化の過程そのものなかから生み出されてきたのではないか、という新たな対日本近代観が提起された。そのひとつに1927年に書かれた戴季陶の『日本論』がある<sup>(27)</sup>。戴季陶は、

四川出身の革命家で、孫文の秘書をつとめた知日派である。彼の『日本論』は、さきにのべた黄遵憲の『日本国志』に対応するものとして書かれている。彼の執筆の意図は、山東出兵を強行した長州軍閥田中義一内閣（1927年4月－29年7月）を批判することにあつた。彼は、田中が代表する日本軍国主義の本質を明治維新にまでさかのぼって究明している。

孫文も戴季陶も、日本との提携によってアジアの復興をはかり、アジアを帝国主義の支配から独立させる、という考え方を終始一貫してもっていた。しかもそれが可能であると考えていた。なぜなら中国の革命運動は日本の明治維新の本質と同じであるから、もし日本に維新の精神が失われていないのなら、当然日本との提携は可能である、というのである。

戴季陶は、明治維新を成功させた最大の要因を「民族の統一した思想，統一した信仰，統一した力」，「日本民族の倫理性」にあるとし、その規範意識を武士道に求めた。彼によれば、武士道の観念は、もともと封建制度下の封禄に対する報恩の考え方から生まれた制度的なものであつた。しかし武士が統治階級となることによって、制度としての武士道がそれに見合うように儒教道德の衣を着、道德としての武士道，信仰としての武士道になったという。つまり武士道が普遍的な倫理に高められたこと、それが日本（明治維新）の近代化への適応を可能にしたのである。彼はそれを「尚武の気風」とよんだ。それゆえに明治になると、それに維新の精神を加え、さらにヨーロッパ思想をその内部にとりこんで明治維新の政治道德がつくりあげられたというのである。

彼は、日本の中国への侵略＝日本の軍国主義化は日本人の尚武の精神（＝民族の道義）の衰えと考えた。戴季陶の論理を追ってみよう。軍国主義とは思想ではなく、総ての政治組織を軍事組織に従属させる制度である。軍国主義は国家主義より導き出される。明治維新によって成立した国家は、民族主義（＝王道・自然）を排して国家主義（＝霸道・武力）に傾斜し、日露戦争をへて軍国主義となった。それをもたらしたのは、日本人によって信仰にまで高められた天皇制支配の確立と、長州閥の官僚たちの権力欲およびそれらのなかに内在している偏狭さと普遍性の欠如にあつた、というのである。ここに示された戴季陶の日本分析は、きわめて鋭いといえる。

この『日本論』は、日本と中国革命との融和が望めなくなった時点で、日本文明の総てを批判するという形で書かれた。その批判は、日本の近代に対する中国の人びとの訣別の宣言であったともいえる。

## 註

- (1) 本稿にかかわる研究書（概説書も含む）は次の通りである。実藤恵秀『近代日支文化論』（大東出版社、1941年）、同『明治日支文化交渉』（光風館、1943年）、同『増補中国人日本留学史』（くろしお出版、初版1960年、増補版1970年）、野村浩一『近代中国の政治と思想』（筑摩書房、1964年）、野沢豊『孫文と中国革命』（岩波書店、1966年）、小野川秀美『清末政治思想研究』（みすず書房、1969年）、山口一郎『近代中国対日観の研究』（アジア経済研究所、1970年）、河原・藤井共編『日中関係史の基礎知識』（有斐閣、1974年）、小島他共編『中国人の日本人観百年史』（自由日本社、1975年）、彭沢周『中国の近代化と明治維新』（同朋舎、1976年）、山根幸夫『論集近代中国と日本』（山川出版社、1976年）、小島晋治『アジアからみた近代日本』（亜紀書房、1978年）、山根幸夫編『近代日中関係史文献目録』（燎原書店、1978年）、原田正己『康有為の思想運動と民衆』（刀水書房、1983年）、有田和夫『清末意識構造の研究』（汲古書院、1984年）、王曉秋『近代中日啓示録』（北京出版社、1987年）、馬家駿・湯重南『日中近代化の比較研究』（六興出版、1988年）、呂万和『明治維新と中国』（六興出版、1988年）、山田辰雄編『近代中国人物研究』（慶応通信、1989年）。本来ならば以下の註記にそれぞれの出典を明示すべきであるが、繁を避けて略させていただいた。記して感謝の意を表する。
- (2) 近代中国人の書いた日本関係の書は、実藤恵秀『明治日支文化交渉』（前掲）<166-617頁>によると、明治初年から日清戦争の頃までに33冊、また同『増補中国人日本留学史』（前掲）<544頁付表>によると、1896-1919年のあいだに174冊が出版されたという。

なお日清戦争期までの日本関係書（著者・書名・執筆年）を列挙しておく。戴名世『日本風土記』（明治初年？）、陳其元『日本近事記』（1875年以降？）、李圭『環游地球新録』（1876年）、王韜『日本通中国考』（1876年）、何如璋『使東述略』（1877年）、同『使東雜詠』（1877年）、黄遵憲『人境廬詩草』（1877年より）、闕名『東遊紀盛』（1877年以降？）、闕名『日本瑣誌』（1877年以降？）、金安清『東倭考』（1877年？）、王韜『扶桑遊記』（1879年）、王之春『談瀛録』（1879年）、黄遵憲『日本雜事誌』（1879年）、竜柴『日本考略』（1877年以降？）、闕名『日本紀遊』（1880年）、闕名『日本雜記』（1880年）、黄超曾『東瀛游草』（1881年より）、姚文棟『東槎雜著』（1882年より）、莊介禪『日本紀游詩』（1883年）、姚文棟『日本地理兵要』（1884年）、四明浮槎客『東洋風土竹枝詞』（1885年）、王詠霓『道西齋日記』（1887年）、傅雲龍『遊歷函經余記』（1887年より）、陳家麟『東槎聞見録』（1887年）、黄遵憲『日本国志』（1887年）、顧厚

焜『日本新政考』（1888年）、葉慶『策鰲雜摭』（1889年）、傅雲龍『游歴日本図経』（1889年）、黎庶昌『拙尊園叢稿』（1893年）、李丹麟『遊歴図記』（1893年）、黄慶澄『東游日記』（1893年）、李嶽蘅『策倭要略』（1894年）、譚祖綸『扶桑景物志』（1894年）。

- (3) たとえば、註(2)の著者のうち、何如璋・黎庶昌は公使として、黄遵憲は参贊として、姚文棟・陳家麟・黄超曾は随員として日本を訪問した。
- (4) 『日本雜記』の原文が収録されている『小方壺齋輿地叢鈔』第10帙には關名となっているが、実藤恵秀『明治日支文化交渉』（前掲）<178頁>によると、著者は、少なくとも駐日公使何如璋と同等（二品）もしくは上位（一品）の高官であろうという。
- (5) 李圭は、その紀行文『環游地球新録』のなかで「日本が西学を尊重し、西法に倣い、有益なことをどしどし改革したことによって国の根本を強くし東海に威勢を張るようになった。」と指摘している。何如璋は日本赴任日記『使東述略』（『小方壺齋輿地叢鈔』第10帙所収）のなかで、明治維新を「数百年の積弊を次第に刷新した」ものとして評価している。
- (6) このことは『使東述略』のなかでも随所に散見される。なおこの翻訳が「初代駐日公使何如璋の赴任日記」と題して実藤恵秀『明治日支文化交渉』（前掲）に収められている。
- (7) 『小方壺齋輿地叢鈔』第10帙所収。
- (8) 『東槎雜著』（『小方壺齋輿地叢鈔』第10帙所収）。
- (9) たとえば陳家麟・顧厚焜らもこの部類にはいる。陳家麟は、1884年第3代駐日公使徐承祖の随員として来日し、『東槎聞見録』（『小方壺齋輿地叢鈔』第10帙所収）を著わす。これは、自然・歴史・文化を網羅した日本百科事典的なものであるが、日本の明治新政のすぐれた点を評価している。顧厚焜は、刑部主事にあって1887年、日本・アメリカ・ペルー・ブラジル・キューバ・カナダ6か国の視察を命ぜられた。そのときの日本の見聞をまとめたものが『日本新政考』である。
- (10) 実藤恵秀・豊田穰共編訳『日本雜事詩』（平凡社、1968年）参照。
- (11) 『戊戌政変記』（中華書局、1954年）、1頁。
- (12) 「進呈日本明治変政考序」『康有為政論集』（中華書局、1981年）、222-223頁。
- (13) 「上清帝第六書」（同前）、213頁。
- (14) 「上李鴻章」『孫中山全集』1（中華書局、1981年）、9-18頁。  
孫文は、陸皓東とともに6月天津にいたり、李鴻章の幕僚羅豊禄を通じて李に意見書を提出したが、受け入れられなかった。これによって、ときの高官を動かして上からの改革を行わせようとする試みは幻想に終わり、孫文は反満革命の道を選択することになった。
- (15) 「在東京中国留学生歡迎大会的演説」「付問題異文」『孫中山全集』1（同前）、277-283頁。

なお講演のタイトル「中国応建設共和国」は『国父全集』2（中央文物供給社、1973年）<193頁>による。この講演のなかで日本と中国の立場に大きな差ができたことについて、次の2点をあげている。

①日本の旧文明は中国から輸入されたものである。50年前、明治維新の志士たちは、中国の大哲学者王陽明の知行合一の学説に心酔したから、みな独立尚武の精神を身につけ、4500万の民衆を水火の苦しみから救う大業（維新）をなしとげた。それに反して中国人はもとより養った実力もちながら異種（満州族）に媚びへつらったために、中国の文明は日本におくれをとることになった。

②日本の衣食住の文明は中国から輸入されたものである。中国では満州の習俗をとり入れたために中国固有の文明は失われ、それは日本にのみ残されることになった。したがって西洋の文明が輸入されると、中国の文明開化は日本よりもはやかったにもかかわらず、国民に何の利益ももたらさなかった。

つまり伝統文化と陽明学説との関係、伝統文化と外来文化の接続のとらえ方のなかに、孫文の明治維新に対する評価が凝縮されているように思われる。

(16) 一般的に日露戦争による日本の勝利は、その当時の革命派・改良派あるいはアジアの人びとによって歓呼と期待をもってうけとめられていた。たとえば当時日本に留学中であった革命家秋瑾は「警告我同胞」（『秋瑾集』上海人民出版社、1960年）<7-9頁>なかで、日露戦争に出征する兵士が民衆の歓呼と熱気のなかで見送られている光景に熱い羨望の眼をむけるとともに、中国にはいつこんな日が訪れるだろうかと述べている。また改良派の梁啓超は「新民説」（『新民叢報』1-72号各論説）のなかで、おくれた「小国」日本が日清・日露の両戦争に勝利し、近代国家となりえたのは、愛国心と団結力による、と指摘した。

(17) 「民報之六大主義」『民報』3（1906年4月刊）。ここにいう両国の国民連合とは「双方の友好」であり、「対等の資格」によるものでなければならぬとし、日本の侵略主義・吸収主義の2派、中国の親日・排日の2派をともに批判した。したがってこのスローガンのなかにも侵略主義への批判がこめられている。

(18) 「陳星台先生絶命書」『民報』2（1905年11月刊）。里井彦七郎「陳天華の政治思想」（『近代中国における民衆運動とその思想』東京大学出版会、1972年）参照。

(19) 「俱分進化論」『民報』7（1906年9月刊）、「印度人之觀日本」『民報』20（1908年4月刊）。河田悌一「否定の思想家・章炳麟」（『辛亥革命の思想』筑摩房、1978年）参照。

(20) 『天義』11・12合冊（1907年11月刊）所収。スカラピーノ、丸山松幸訳『中国のアナキズム思想』（紀伊国屋書店、1970年）参照。

(21) 「再論政府借日本債十兆元」『民立報』1911年4月4日-7日。

(22) 「復北京学生書（1915年5月）」『孫中山全集』3（前掲）、175頁。俞辛焯『孫文の辛亥革命と日本』（六興出版、1989年）参照。

- (23) その発端となったものとして、1917年、日本の援段（段祺瑞）政策を批判した寺内首相宛の書簡（「致日本首相寺内正毅函」『孫中山全集』4）がある。
- (24) 1919年以降の孫文の対日批判の深まりを示す事例については、藤井昇三「孫文の対日態度」（『現代中国と世界』慶応通信、1982年）参照。
- (25) 『東京朝日新聞』1919年6月21日、22日。「答日本『朝日新聞』記者問」『孫中山全集』5（前掲）、71-74頁。
- (26) 「致犬養毅書」『孫中山全集』8（同前）、401-406頁。同様のことを1923年5月、鶴見裕輔との会談（「広東大本營の孫文」『改造』1923年5月号）で述べている。そのなかで、日本の過去20年間の対中国外交は悉く失敗であり、辛亥革命以後の北京援助政策は悉く中国人の期待をうらぎった近視眼的政策である。ただこの故に中国革命は失敗したのだ、と。
- (27) 『日本論』は1928年、上海民智書局より出版された。ここでは『革命先烈先進詩文選集』4（中華民国各界紀念国父百年誕辰籌備委員会出版、1954年）所収の『戴傳賢選集』第3編「日本問題」の「日本論」を利用した。

（文学部 助教授）